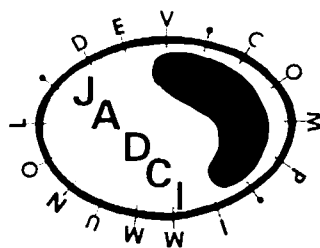


# JADCI News

No. 29

2006. 4. 7

第18回学術集会  
古田賞の制定  
新役員会発足



日本比較免疫学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html>

目 次：

日本比較免疫学会第18回学術集会開催の案内	-----	1
古田賞の制定と応募について	-----	2
三代目の仕事	吉田 彪 -----	3
二十六夜待ち	古田恵美子 -----	4
野口英世と hemagglutinin と私	宍倉文夫 -----	6
モデル生物とは縁遠い生物を使った比較生物学の価値	川畑俊一郎 -----	9
活気ある比較免疫学会の具体像を求めて	中尾実樹 -----	11
事務局より	-----	12
新会員の入会を歓迎いたします（入会申込書）	-----	14

日本比較免疫学会 役員

会長：吉田 彪（ライフケア互酬会）  
副会長：川畑俊一郎（九州大学）  
庶務担当：中尾実樹（九州大学）  
学術集会担当：中村弘明（東京歯科大学）  
英文抄録担当：飯島亮介（帝京大学）  
ホームページ担当：広瀬裕一  
監査：友永 進（昇陽学園）、和合治久（埼玉医科大学）

\*活性化委員会：中尾実樹（九州大学）、飯島亮介（帝京大学）、安住 薫（北海道大学）、阿部健之（日本大学）、谷合幹代子（農業生物資源研究所）木村美智代（埼玉医科大学）

発行者：日本比較免疫学会長 吉田 彪

事務局：庶務担当 中尾実樹

住所 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

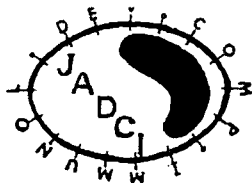
九州大学大学院農学研究院 水族生化学研究室内

事務局 e-mail: jadci2@agr.kyushu-u.ac.jp

電話 092-642-2894（ダイヤルイン） FAX 092-542-2897

郵便振替 口座番号 01730-9-80586

加入者名 日本比較免疫学会



# 日本比較免疫学会

## 第18回学術集会 学術集会長 藤井 保

The 18th Scientific Meeting of the Japanese Association for Developmental & Comparative Immunology

会 期:2006年8月23日(水)~25日(金)

会 場:県立広島大学 広島キャンパス

問合せ先 :〒734-8558 広島県広島市南区宇品東 1-1-71

県立広島大学 人間文化学部 健康科学科内 第18回学術集会事務局 増山悦子

Tel & Fax:082-251-9841 E-mail:[masuyama@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:masuyama@pu-hiroshima.ac.jp)

参加費 :会員・非会員 3,000円 学生 2,000円 (教育講演、特別講演のみの参加は無料)

シンポジウムのみ参加費:1,000円 (講演要旨集代)

懇親会費 :3,000円

### ★第1日目 (8月23日)

午 後 : 役員会

日本比較免疫学会事務局:九州大学大学院農学研究院  
水族生化学研究室 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1  
TEL : 092-642-2896 E-mail : [miki\\_n@agr.kyushu-u.ac.jp](mailto:miki_n@agr.kyushu-u.ac.jp)

### ★第2日目 (8月24日)

午 前 : 一般講演 (ポスター発表)

午 後 : 総会、教育講演および特別講演、懇親会 (学生食堂)

教育講演 : 『ゲノムが語る自己非自己識別システムの歴史』

笠原 正典 (北海道大学大学院医学系研究科)

特別講演 : 『補体系の進化』

野中 勝 (東京大学大学院理学系研究科)

### ★第3日目 (8月25日) 《広領域交流シンポジウム》(9:00~)

#### 『円口類 : 生命科学への発信』

『ヤツメウナギの発生から見た顎口類の進化』 倉谷 滋 (理化学研・発生)

『ヌタウナギ魚類の染色体放出に関する分子遺伝学的解析』 久保田宗一郎 (東邦大・理)

『ヤツメウナギにおける黒色素胞刺激ホルモン・ $\beta$ -エンドルフィン共通前駆体の特殊な構造』 高橋明義 (北里大・水産)

『ヤツメウナギの補体制御因子と Toll 様受容体』 石井秋宏、松尾 綾、松本美佐子、瀬谷 司 (北大院・医)

『ヤツメウナギに見る補体古典的経路の起源』 松下 操 (東海大・工)

『ヤツメウナギにおける VLR 遺伝子再構成の分子機構』 名川文清、岸下奈津子、西住裕文、坂野 仁 (東大院・理)

『MHC 領域の起源と脊椎動物におけるゲノム進化:ヌタウナギゲノムからの示唆』

\* 詳しくは同封の案内をご覧ください。

## 古田賞の制定と応募について

この度、古田前会長のご厚意により、本学会へ多大なご寄付を頂戴いたしました。ご寄付の趣旨は、本学会活性化の為に奨励金等として活用して欲しいとのことでした。そこで3月17日の新役員会において、この趣旨に則り、学会活性化のための「古田賞」を比較免疫学の進歩・発展において学術上重要な貢献をした研究者（個人またはグループ）に授賞することにいたしました。賞の概要は以下の通りです。

日本比較免疫学会の益々の活性化の為に、自薦他薦を問わず、多くの会員の方々にご応募頂きたいと存じます。推薦書（大賞）の様式は JADCI ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/>) からダウンロードできます。締め切りは平成 18 年 6 月 15 日（木）必着でお願いいたします。

### 古田賞について

- 1) 名称：「古田賞」とする。
- 2) 古田賞の対象：大賞：比較免疫学の発展に寄与した研究に対して授与する。  
過去5年間程の論文に基づき行い、その成果（あるいはその一部）が本学会の学術集会で発表されたものを対象とする。  
奨励賞：当年の学術集会抄録から優秀なものを選考する。  
本学会会員であれば年齢は不問とする。
- 3) 賞の内容：大賞は賞金 20 万円と賞状、奨励賞は賞金 5 万円と賞状。
- 4) 選考方法：第一回は学会長および活性化委員が選考委員会を担当する。第二回以降の選考委員は改めて選出する。これらの賞にふさわしいと思われる該当者が居ない年には受賞者なしとする。
- 5) 記念講演：大賞受賞者は、原則として当年集会で受賞講演をする（30分程度）。授賞式は総会時に行う。
- 6) 応募要領：JADCI News No.29 に同封する推薦書（JADCI ホームページからダウンロードできます）に記載の上、2006 年 6 月 15 日までに JADCI 事務局に郵送する。自薦他薦を問わない。

なお、本賞を比較免疫学の学会賞「比較免疫学会古田賞（仮称）」として制定することを、本年の学術集会において開かれる総会で会員の皆様にお諮りいたします。可決されましたならば、直ちに上述の古田賞受賞者を「比較免疫学会古田賞」第一回受賞者として表彰することに致したいと思っておりますので、この点ご理解頂きたくお願い申し上げます。

このたび選ばれて本学会の会長になるにあたり、大変な仕事を引き受けてしまった、というのが今の私の偽らざる感想です。責任は重大であると自覚するからです。初代の村松繁先生、二代目の古田恵美子先生に次いで三代目ということになります。三代目の仕事というのは概して難しいものらしく、古来いろいろな言われ方をして来たようです。勿論、三代將軍家光は徳川300年の基礎を確固として築くという偉業をなした三代目の成功例です。でも世の中には「売家と唐様で書く三代目」と言われるように、家業を食いつぶしてしまった「若旦那」の例は枚挙に暇がないでしょう。

本学会についての私の感想の一端は、JADCI News の28号（昨年11月発行）の巻頭言で述べた通りです。そこでも述べましたように、本学会は設立から今年で18年目になるわけで、どのような“組織”でも10年も経つと設立当初の活力が見られなくなる、という一般論からすると既に人の年齢で言えば“初老期”に入っていると言えます。事実、その症状はあちこちに見受けられるようです。日本比較免疫学会の主たる活動は年に一度の学術集会です。その学術集会を会員の皆様一人一人が、自分の“面白い”研究の成果を同好の志や競争相手の集う所で発表し討論し切磋琢磨するという、そういう会にしようともう一度思い起こす事が大切だと思います。設立当初はそのような会であったと聞くにつけ、その思いを強くします。昨秋来スタートした活性化委員会を中心にして、皆様の比較免疫学研究へのモチベーションを高揚すべく、比較免疫学の新しいアプローチは何か、将来性のある面白い研究課題は何であるか、を一緒に考えて行きたいと思っています。

昨年の年頭所感に古田前会長が述べておられるように、世界に対して「ここに日本比較免疫学会あり」という学会にして行こうではありませんか。その為には、会員の皆様の世界的な研究の成果が発表されるような、そして「あの会に参加して本当に良かった」と参加者が思うような学術集会にするよう、一緒に努力しようではありませんか。私も「売家と唐様で書く三代目」と言われたいように微力ながら私の役目を果たして行きたいと思っています。

## 二十六夜待ち

比較免疫学研究所

古田恵美子

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、垂れ込めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情深し。」

私の好きなこの文は、吉田兼好の「徒然草」第百三十七段の冒頭のくだりです。「金で人の心は買える。女は金と共についてくる。」と豪語する若者が現われ、年若い女性の中にはブランド物を手に入れるためなら、体を売ることさえ厭わない、そんな時代になってしまいました。何時から日本人はかくも貧しい人間の集まりになってしまったのでしょうか？

若者だけではありません。つい先日世界を驚かせた「論文捏造」問題がありました。科学者ですら、売名のためなら良心すら売ってしまう時代になったのです。

何故なのでしょう？ この世界は「光」と「影」が余りにも強く区別されるようになった故かもしれません。光の当たらない部位は、あまりにも暗くなりすぎたからかもしれません。「ゆとり教育論」がかえって競争社会を作る起因になってはいないでしょうか？

幕末の頃、我が先祖（女性）は、「子女にも教育を！」と屋敷の離れに士族の子女を集め、茶道、華道、琴、薙刀、歌道などを教える私塾を作りました。明治維新後、世の中は正に「光」と「影」の時代にはいっていったのでした。しかしこの私塾は、ここを終えた女性達に守られ、1905年学校と認められたのでした。そして昨年（2005年）100周年を迎え記念碑除幕式に立ち会ってまいりました。「人格の完成・婦徳の涵養」が建学の精神でありました。戦中・戦後の苦難の時代、この私学を支えた女性達の幾人かにお会いできました。90歳近い女性達の今なお毅然たる姿に心うたれて参りました。

他人と「競い合う」のではなく、「己に克つ」ことが全人教育のひとつで有る筈です。現在の教育論の中に「人格形成」と言う言葉がはいっているのでしょうか？

若者はマネーゲームに没頭し、女性達の多くは、右を見ても左を見ても同じブランド品を身につけることで、持たざる者を差別しているような気がいたします。兼好が書いているように、「花はさかりを、月はまんまる」だけを見るものではないのです。人間社会に「勝ち組」も「負け組」も存在しないのです。若し存在するとしたら、むしろ「負け組」の中に「いとおかしく情深き」人々

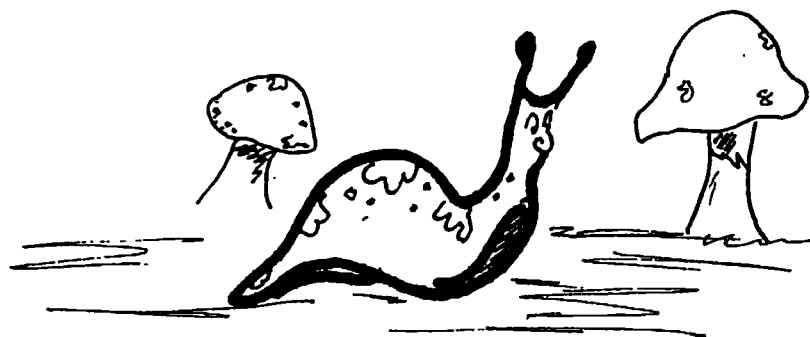
が存在しているのではないのでしょうか。

江戸の頃、人々は「花はさかり、月はくまなき」を愛する人は、むしろ趣無しとされました。この事は、もしかしたら「負け惜しみ」だったのかも知れません。やせ我慢だったのかも知れません。が、まさに消えんとする事象のなかに、美を見出していたのです。「二十六夜待ち」とは、夜空にかかる月のあと四日で闇になってしまう、そして、夜明け近くになってやっと姿を現す欠け月に心を寄せ、仏の姿を見て俳句や歌にその美を表したのです。

このような心は、もう既に失われてしまったのでしょうか？

「ひとり、ともしびのもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよのう慰むわざなる。」(徒然草第十三段：吉田兼好)

**SLUG it's not just a NAME**



**It's A WAY of Life**

## 野口英世と hemagglutinin と私

日本大学・医学部・化学教室  
宋倉 文夫

2004年11月、千円札の肖像が「夏目漱石」から「野口英世」に代わり、私たちは細菌研究者野口の名前をよく知るところとなった。しかし、野口が、Innate (Natural) Immunity に深くかかわるレクチン (lectin) のパイオニアであることはあまり知られていないと思う。

野口の細菌学研究の華やかさはさておき、20世紀の初頭に行ったカプトガニ (*Limulus*) hemagglutinin の研究の存在を紹介して、斯界に果たした足跡を偲びたい。実は、カプトガニ (*Tachypleus*) hemagglutinin の研究をおこなうようになって野口の論文にであい、20世紀初頭の彼の研究を我田引水していると言うほうが正しいのだが。

'78年10月、Woods Hole MBL (ウツツホール海洋生物学研究所) でカプトガニの医学生物学研究に関するシンポジウムが開催された。日本からも一昔前の世代 (今活躍している年代を40歳前後とすると前の世代) がアメリカでのシンポジウムに参加した。その2年前の'76年、日本で最初のカプトガニシンポジウム (それからまだ開かれていないので気がかりな) 「カプトガニの医学への貢献」が岡山県笠岡市で開催された。丹羽允先生や岩永貞昭先生はすでに大御所の風格が漂い、高木尚先生 (岩永先生の初期のお弟子さん) は新進気鋭の頃であり、博士課程2年 ('76年) の私は文字通り駆け出しの「若輩」であった。

もちろん、私にとって初めての外国旅行で初めての口演発表であった。あてがわれた居室でうとうととしていたらすっかり寝入ってしまい、シンポジウムの少し前で目が覚め、かなりあわてた記憶がよみがえる。Dr. Elias Cohen (オルガナイザー) はアメリカ人にしては小柄であるが、彼の発音は抑揚が強く、今でも No-gu-chi と hem-ag-glu-ti-nin や co-a-gulo-gen は耳を離れない。

Dr. Cohen は野口の研究を MBL における歴史的な実験として紹介した。Dr. John Marchalonis が無脊椎動物の自然免疫に関わる分子を照準にして *Limulus agglutinin* の研究を開始したのが60年代なので、野口の仕事 (1903年) は、まさに歴史的な実験だった。60年代~70年代は無脊椎動物の lectin 研究が盛んになり、多くの研究者が参入した。清水暁先生 (愛知県がんセンター研究所; MBL のシンポジウムで一緒) の論文に野口が引用されているので、清水先生の論文からも野口の研究にさかのぼれるのであるが、その頃の私は清水先生の lectin の研究を知る由もなく、Dr. Cohen がこれほど鮮烈に印象深く野口を紹介してくれたことに少なくとも私は感動した。



その後、岩永先生（の大阪大学タンパク質研究所時代）のお弟子さんの一人、京都大学・霊長類研究所の中村伸先生と現存カプトガニ 4 種類 (*Limulus*, *Carcinoscorpius* と 2 種類の *Tachypleus*) の coagulogen の一次構造を分子指標に種分化の共同研究を終えた後、私は coagulogen から hemagglutinin に研究をシフトした。

その頃、私も就職難に遭い、結局、筑波大学（5 年間の期間限定職）を退職し、デトロイトで *Lumbricus*（ミミズ）ヘモグロビン（Hb）の一次構造を研究することになった。渡米直前、高木先生の研究室を訪れ、先生から「210nm の detector がなかったらオシマイだね」と。Dr. Serge Vinogradov はミミズの Hb 研究でもう一つのアメリカのグループ（Dr. Austin Riggs）と対峙していた。私がデトロイトの Serge Vinogradov の研究室（生化学教室）に着くとそのまま Dr. Daniel Walz の研究室に連れて行かれた。後から話を総合すると事情が飲み込めたが、高木先生の一言が脳裏を掠めた。

Dan Walz のもとで研究を進めるようになって、ほどなくしてここが血液学研究で高名な Dr. Walter Seegers の研究室で、そっくり Dr. Daniel Walz が後継したと知った。なぜ Dan Walz がと思ったが、それにはそれなりの理由があったのだろう。この研究室がなぜこんなに潤沢なのかの方がもっと知りたかった。これも後で判ってきたことだが、GM, Chrysler, Ford と全米のトップ 4 に入る自動車産業の都市デトロイトでは企業が大学に豊富な基金を提供し、ヒトの血液凝固系で著名な Seegers の生理学教室も医学関係を含むさまざまな団体から研究資金が寄せられていた。

研究機器は何もかもそろっていた。FPLC や Peptide Sequencer (ABI) もピカピカだった。すでに骨董品の趣の畳 1 帖半もある Beckman の spin cup 式シーケンサーは昼夜運転され、ここがアメリカだと圧倒された。この研究室に在籍することで、高いスタートラインから研究が始まったことに興奮と戸惑いを覚えた。Dan Walz のところに連れてこられた理由と高木先生が心配された理由もわかった。しかし、ということは、伝統のない研究室では独創的な実験でなければとても太刀打ちできないことなのか。同じようなことは、後年、日本比較免疫学会の懇親会で渡邊浩先生からも聞くことになった。（その後、田中邦男先生のお蔭で日本に帰ることになったのだが、その続きは *Limulus* agglutinin から離れ、マボヤ (*Halocynthia roretzi*) のセルピン (serpin) の仕事に移るので、先を急ぎ、ここでは省略したい。)

現在、*Limulus* lectin は結晶構造も解明され、タンパク質とリガンドの相互作用を立体構造から追跡し、さらに時分割 X 線回折も試みられる時代となった。日本大学量子科学研究所に X 線結晶回折が可能な生体高分子構造研究実験室を立ち上げ、昨年 5 年間の学術フロンティアを終了し、引き続き 3 年間の学術フロンティア推進事業の一翼を担っている。今年夏には、日本大学の資産を使い、

ヨーロッパの放射光施設を視察に出かけることになっている。ご存知のように、日本には素晴らしいタンパク質化学研究の歴史と伝統がある。文部科学省・高エネルギー加速器研究機構の大型放射光施設 (Photon Factory) と財団法人・高輝度光科学研究センターのそれ (SPring-8) は世界の最高峰である。しかし、ヨーロッパもアメリカもこのままではすまないだろう。この夏の休暇を使って訪問するヨーロッパの放射光施設は、グルノーブルにある ESRF (European Synchrotron Radiation Facility) とロンドン近郊に 2004 年に完成した Diamond Light Source である。文部科学省は年間 100 億円 (5 年計画) の資源をこの分野に投入し、さらに同額以上の 10 年計画を昨年決定した<sup>注1</sup>。遺伝子解析の二の舞を演じたくないことは、誰にとっても同じ思いだ。

話は元に戻し、野口と私はもちろん何の関係もない。ただ新札が手を離れるときの瞬間、野口の視線に気づきハッとする (もちろん、いつものことでないが)。この感覚はなんなのか。子供に無駄遣いさせるなどという視線ではない。彼ほどの仕事をしてこなかった私の当然の引け目かもしれない。

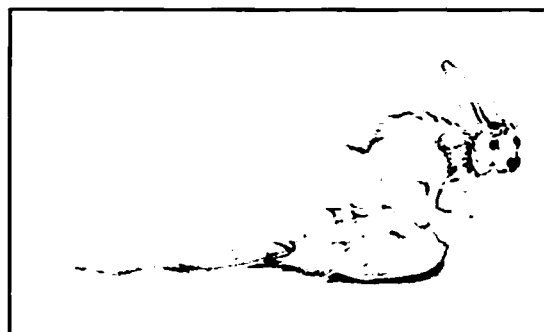
20 世紀はじめのパイオニア的な野口の業績は、1 世紀を超え、いまでも輝いている。21 世紀のはじめ、古田恵美子会長の事務局を田中邦男先生から引き継いで 5 年、自然免疫学の時代を予感させる兆し<sup>注2</sup>が見えてきた。大竹伸一<sup>注3</sup>さんと阿部健之<sup>注3</sup>さんと共同で運営してきた学会事務局を中尾実樹新事務局長に委ね、吉田彪新会長以下そうそうたる役員のパテンシャルに Natural Immunity の確かな展開と日本比較免疫学会の発展を重ね映しにしている。

注1 朝日新聞 2005 年 5 月 29 日朝刊の「10 年計画」に関する記事を参照する。

注2 朝日新聞 2006 年 3 月 7 日夕刊の「自然免疫」に関する記事を参照する。

注3 日本大学医学部生物学教室所属。

注4 カプトガニ研究者の誰もが尊敬している Dr. Federik B. Bang の奥様の Molly Bang-Campbell さんの挿絵です。20 世紀から 21 世紀の Natural Immunity の発展を暗示しているようですので借用 (*Progress Clinical and Biological Research 29*, Alan R. Liss, Inc. 1979) しました。



Molly Bang-Campbell <sup>注4</sup>



## モデル生物とは縁遠い生物を使った比較生物学の価値

九州大学大学院理学研究院生物科学部門

川畑俊一郎

今年の正月三ヶ日を過ぎて間もない頃、日本比較免疫学会の副会長への就任依頼のお電話をいただき、生来の気の弱さからか、分不相応にもかかわらず、つい引き受けてしまいました。これまでの学会参加の不真面目さを恥じ、本学会の発展のために微力を投じさせていただきたいと存じます。

自宅の眼下には、博多湾が広がり、ひょうたんを思わせる小島が浮かんでいます。檀一雄が晩年を過ごし、井上陽水が歌にしたことでも知られ、春は菜の花、秋はコスモスで覆われる、郷愁を誘う能古島（のこのしま）です。大学に入学したてのころ、能古島のなぎさにカプトガニのぬけ殻を見つけて、持ち帰ったことがあります。映画に登場する宇宙生物のような姿に、いたく感動したことを憶えています。その後、研究対象にすることになろうとは、夢にも思いませんでした。カプトガニは、甲殻類よりもクモ類に近縁で生きた化石と呼ばれ、ジュラ紀の化石種は、一見してそれとわかるほど現存種と似ています。一方で、東南アジア沿岸に生息するカプトガニ（3属4種）の凝固タンパク質（コアギューローゲン）の塩基配列を比較すると、分子レベルでは他の生物とかわらない速さで進化してきたことがわかります。

ところで、研究者の喜びのひとつは、研究成果が原著論文として科学雑誌に掲載されることでしょう。私たちの研究成果に対する評価の重要ポイントは、「普遍性」であるらしく、正当な評価を得ることは至難の技と思えます。生きた化石という非科学的な「特殊性」に対する偏見の呪縛から抜け出せないでいる研究者も少なくありません。ある研究評価の審査会で、「そろそろ、ショウジョウバエを使った研究に移られたらいかがですか」と無情にも研究転換を勧められ、研究成果が首尾よく評判の雑誌に掲載されれば、「世界的に競争相手の少ない研究ですからねえ…」と知り合いの研究者に皮肉られたこともあります。

多様な生物の遺伝子情報が蓄積するにつれて、あるタンパク質群に、種を超えた構造と機能の普遍性があることが分かってきました。分子を対象にすれば、外部形態から醸し出される特殊性は薄れ、普遍性が垣間見えるときがあります。タンパク質の構造と機能の普遍性をテコにして、種に特有の現象としてとらえていたものを、普遍的生物現象として分子レベルで討論すればよいわけです。

たとえば、タキレクチンというカプトガニのタンパク質群があります。タキレクチンは、病原菌を認識して凝集することで、体内への拡散を防ぐ働きがあります。ある時、タキレクチンのひとつ（タキレクチン-5）を解析していた大学院生が駆けながら報告にきたことがあります。その塩基配列は、ヒトのフィブリノーゲンに類似しているのだということでした。私自身、非常に感激しました。フィブリノーゲンは、ご存知のように脊椎動物の血液凝固タンパク質で、血液が凝固する際に、フィブリンに変換され、複数のフィブリンが相互に認識することによって凝集し、ゲル化します。カプトガニ特有のタンパク質と思われたものが、実は、フィブリノーゲンと共通の祖先遺伝子から進化していたわけです。カプトガニのタンパク質が、普遍性という市民権を得た瞬間であり、特殊性と普遍性が紙一重であることの証でもあります。その後、X線結晶解析により、タキレクチン-5の病原菌に対する認識部位は、フィブリンの重合部位と一致することも判明しています。

現在の遺伝学を駆使するモデル生物を使った研究の威力は、ここで述べるまでもなく、その成果の利用は不可欠なものとなっています。しかし、この地球に生息する生物の生命現象を理解する際に、すべてにモデル生物が最適なはずはありません。特に、環境に適応進化してきた生物の比較免疫学の分野にあつては、免疫反応に関与する分子群が種によってかなり異なっているように思えます。新たな研究プロジェクトに参入しようとする時、それまで扱い慣れた動植物が不向きなことがあります。その際、どの生物を使えば目的に合致する最適な解析ができるかを判断し、躊躇なくその研究材料を導入できることが比較生物学を志す研究者の特権であり、使命でもあると確信しています。

風のないおだやかな夜、能古島を望む縁側で天体観測をすることがあります。遥かな空に惑星や星座が街あかりに霞んで見えたとしても、望遠鏡をむければ、230万光年の時空を越えたアンドロメダ銀河の光も容易に受け止めることができます。心静かに眺めることで、はじめて見えるものがあります。研究においても、「普遍的研究」が跋扈する目抜き通りをちょっと避け、目に痛いネオンライトを消して、真実に遭遇したいと願っています。

## 活気ある比較免疫学会の具体像を求めて

九州大学大学院農学研究院 中尾実樹

昨年の学術集会で発表されましたように、JADCI の「活性化委員会」が立ち上がりました。JADCI のメインイベントは学術集会ですから、現在の目に見える主な問題点は集会への演題申込み数・参加者数の減少であり、これを増加に転じさせることが第一の目標です。学会の活性化にとって重要なもう一つの点は、若手（＝次世代）の育成です。これらの目標を達成するために活性化委員会が制度の改善を模索する一方で、どんな学術集会の様態と雰囲気が見たいのかについて、会員の一人一人がイメージを膨らませることが、学会の活性化にとって最も重要だと思います。

私が JADCI 学術集会上に初めて参加したのは、第 4 回（1992 年、秋吉台）でした。コイ補体 D 因子がきれいに精製できて、その機能解析をしたら奇妙な現象に出くわし、それを報告・相談したかったのが動機でした。期待通り、参加者各自の専門を超えてディスカッションできたのを非常に心地よく感じました。特に和合治久先生からフレンドリーな励ましの言葉をいただき、高揚した気分福岡に帰ったのを覚えております。さて、これから若い人々に同じような刺激を味わってもらい、比較免疫学をさらに興隆させるにはどうしたらいいでしょうか。私が思いつくまま書いてみますと、

- ・まず比較免疫学が夢のある学問であること
- ・院生や若い研究者に発表と実りある議論の場を提供できること
- ・最新の技術・知見が得られ、各自の研究に新しい展開を与え合えること
- ・シニアな会員もたまには褒めてもらえること
- ・のんびり下戸も楽しめること
- ・参加した会員が「今度は主催してみようかな」と思えるような雰囲気であること

皆さんはどうお考えでしょうか。活性化委員に気軽にご意見をお寄せ下さい（事務局メールアドレス宛でも結構です）。

活性化への具体的取組みは役員レベルで既に始まっています。吉田会長のフットワーク、中村先生（学術集会担当）と藤井先生（今期集会長）のご奮闘には迫力があります。そして古田賞です。古田先生の JADCI への情熱と愛情を熱く受け止め、会の活性化と運営に微力を尽くします。まだまだ不慣れな庶務担当（活性会員兼任）ですが、褒められることも叱咤激励されることも好きなお調子者ですが、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

事務局より

**\*所属・住所が変わったら至急ご連絡を！**

News等の送付に宅配便を利用しております。転送ができませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡ください。次ページの書式に記入して郵送またはFAXしてください。同じ内容をe-mailでお送り頂いても結構です(jadci2@agr.kyushu-u.ac.jp)。

**\*会費納入のお願い**

平成18年(2006年)度分の会費(3000円)の納入をお願いいたします。  
年会費の払込は、同封の加入者名「日本比較免疫学会」の払込用紙(青色罫)をご使用下さい。本年度から、払込料金は払込人(会員)の負担となったことをご了承下さい。また、事務局移転のため、振替口座が新しくなっています。旧振替用紙は破棄してください。  
学術集会参加費等の払込は、加入者名「日本比較免疫学会第18回学術集会」の払込用紙(赤色罫)をご使用下さい。  
くれぐれも、用紙のお間違いがないようによくお願いいたします。

**\*Newsへの寄稿を募集しております。**

エッセイ、学会参加記、JADCIへのご意見・ご提言などをお待ちいたします。庶務担当中尾までお寄せ下さい。また、Newsを充実させるため、その構成や編集についてのご意見も歓迎いたします。

## 第7回日本比較3学会合同シンポジウムのご案内

本シンポジウムが、以下の日程で開催されます。  
奮ってご参加ください。

テーマ：「比較生物学の現状と展望」

日時：2006年7月27日(木)午後

場所：静岡県浜松市「クリエート浜松」

当番学会：日本比較生理生化学会

(日本比較生理生化学会の会期：7月27日～29日)



新会員の入会を歓迎いたします。下記入会申込書をコピーしてご利用下さい。  
入会金不要、年会費 3000 円 (入会申込み頂ければ振替用紙をお送りします。)  
送付先：日本比較免疫学会(JEDCI)事務局  
〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院農学研究院  
水族生化学研究室内  
(お問合せは Tel 092-642-2894, または jadci2@agr.kyushu-u.ac.jp まで)

---

## 入会申込書

このたび日本比較免疫学会に入会したく、下記の通り申し込みます。

年 月 日

日本比較免疫学会

会長 吉田 彪 殿

氏名
同ローマ字
所属
会員種別：個人会員
連絡先 (〒 - ) (所属先・自宅 一方を○で囲む)
TEL 内線 FAX
e-mail
専門分野